

# 小説家として、 ずっと書き続けていきたい

ゲスト◎作家

## 角田 光代氏

作品は、怒りから始まる

——作家を目指したのはいつごろからですか？

小学校1年のときです。授業で作文を書いたら、それがすごく楽しくて。そのとき将来の夢を書くように言われて、作家と書きました。私の場合、国語以外の教科にまるでついていけなくて、逆にほかのことに関心が向かなかったんです。もう少し勉強ができたなら、語学の仕事をしたいとか、宇宙の仕事したいとか、夢がいろいろ広がったと思いますけど。私、3月生まれなんですけど、3月生まれの子って、すごく不利なんですよ。他の子に比べてまだ小さいから、幼稚園に行ってもみんなと同じように遊べない。だからずっとひとりで絵本ばかり読んでいて、それが本好きになったきっかけですね。ちなみに、作家や写真家って、早生まれの人がすごく多いんですよ！

——作品はどんなふうに使われるのですか？

最初に小説の核になる部分、テーマを決めます。私の場合、それは社会への怒りであることが多い。たとえば、ある事件を知って、どうしてこんなことが起きたんだろうって



**プロフィール** 1967年神奈川県横浜市生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。90年、『幸福な遊戯』で海燕新人文学賞を受賞して作家デビュー。96年『まどろむ夏のUFO』で野間文芸新人賞、98年『ぼくはきみのおにいさん』で坪田譲治文学賞、04年『対岸の彼女』で直木賞を受賞。小説だけでなく、エッセイも多数。若い女性から圧倒的な共感を得ている、いま最も注目される作家のひとり。



輪島功一スポーツジムにて、輪島功一氏と



2005年第132回直木賞授賞式にて



角田氏の最新刊『ツリーハウス』  
(文芸春秋)

て憤る。そこから、私は何に対して怒っているのかを考える。それがテーマになって、そこからストーリーとキャラクターを作っていきます。でも、そのときはもう怒りは捨てないといけない。怒りがあると、私だけのちっぽけな正義が小説になってしまふんです。私がこれを正しいと思っても、世の中には人それぞれの正しいさがある。自分の正しさだけを書いたら、それは小説じゃなくて、やっぱり作文ですよ。

——作家は自分の想いや考えを表現するわけですが、他人にどう思われるか、受け入れてもらえるか、怖くなることはありませんか？

怖いですよ。特にデビュー当時はもっと自分の感じ方に近い作品を書きましたから。実際、最初は全然売れなくて、私の小説は受け入れてもらえないんだって思い込んでました。あと、批評という形でもすごく攻撃されることもあります。批評家に酷評されて、書けなくなった時期もありますし。好きで始めた仕事ですけど、いまだに怖いんですよ。今度『ツリーハウス』(文芸春秋という本を書いたんですが、これは戦時中の満州と日本を舞台にしたお話で、当然、自分の知らない時代を書いている。だから嘘くさいと言われたらどうしようとか、不安はいつもありますね。

——角田さんの作品は、登場人物の心理描写が独特で引き込まれます。こうした着想はどこからくるのでしょうか？

私は人の心の明るい部分より、暗い部分に興味があるんです。でも、人の心といっても、結局は自分の心しかわかりませんよね。自分の汚い部分って、ふつうは見たくないからフタをしますけど、私は書く仕事をしているからそこをこじ開けて、あ、こんな汚いんだってのぞき込む。そして、私にあるんだから他の人にもあるはずだと信じてそれを表現します。

特定の人をモデルにすることはありません。ただ、苦手な人に会うたびに、私の場合、「この人と合わない」で終わらず、何が自分と合わないか、どうしたら距離が縮まるかをわりと考えるほうなんです。だから苦手な感じの人を書くのが得意なのかな。

### 仕事は9時～5時、週休2日！

——作品を書く作業は本当に大変だと思えますが、途中で投げ出したくなることはありませんか？

毎日です(笑)。私の場合、一つの仕事に疲れたら別の仕事をします。今、締め切りが一カ月に28回あるんです。それでも気分転換できないときは運動。ボクシングジムに通っています。仕事は平日の9時～5時。土日は完全に休みにしています。若い頃は芸術家肌の作家に憧れていたんですね。気がついたら朝だったとか、登場人物が勝手に動き出したとか。でも、あるとき自分はそのようなタイプじゃない。登場人物は動かないし、私には何も降りてこない(笑)。もう、地道

に書いていくしかない。だとすると、区切らないと逆に終われなくなっちゃうんですね。

——次の作品のご予定を教えてください。

ボクシング小説を書く予定です。登場人物は全員男性。私の小説は男性がイヤな性格ばかりだと言われるので、ちゃんとした人も登場する作品を書いてみよう。あと、肉体の動きを言葉だけでどこまで描写できるかにも挑戦したかった。これにはきつかけがあつて、沢木耕太郎さんのボクシングのノンフィクション作品を読んで、その描写力に感動したこと、三浦しをんさんの『風が強く吹いている』(新潮社)という駅伝小説を読んで、まるでフォームが見えるように描いてあつたことに刺激を受けたことです。

——最後に、読者の皆さんにメッセージをいただけますか？

私は今年で作家デビューして20年なんです。改めて思うのは、一つの仕事を続けることがどれだけ大変で、大事なことから長く一つの会社に勤めている人と話していると、仕事をコロコロ変える人より、しっかりと柱があつて頼りがいがあると感じます。私も作家デビューしてからも、食べられなくて派遣社員をやったことがあるし、30代でアルバイトも経験しました。もちろん、それは作家という仕事を続けるためです。今でも仕事がなくなら働きましますよ。スナックとかコンビニとか。でも、ちょっと年齢制限にひっかかりそうなので、最近考えているのは賄い婦さん(笑)。とにかくどんな状況になつても、小説が私の仕事。ずっと書き続けていきたいと思っています。